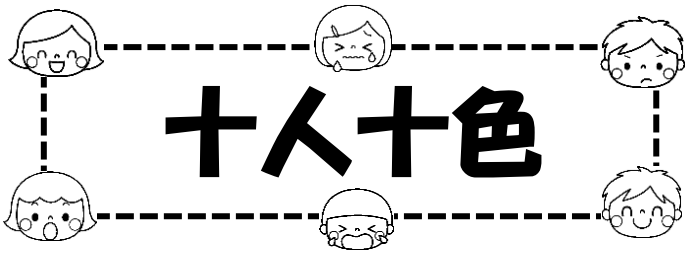

十人十色

2021・9・30(木)
縄瀬　保育園
池之上　俊江
NO．11

「わんぱくフェスティバルへの思い」

いよいよ土曜日はわんぱくフェスティバル。子ども達も晴れを願い、てるてる坊主を作って飾ります。その中でも５組の思いは違うようです。ある日、手洗い場で一緒になったＹさん。わんぱくに向けてそれは熱心に竹馬を練習しました。「園長。５組のおとこたち竹馬乗らないよね！わんぱくもうすぐなのに！」私は、そうだよねと返しながら可愛い顔のＹさんから“おとこたち”という言葉がでてきた事に心の中で大笑いでした・・・。「男の子はまだ、Ｙさんみたいに竹馬に興味がわかないんだと思う。園長は５組のみんなが自分で選んだ競技をしてほしい。いつか竹馬したい！って思うまで待とうと思うんだ」と話すと「そうだよね。女の子は練習するけど、男の子はまだ興味ないみたいだしね。わかった。園長！」と笑顔で走り去っていきました。竹馬に乗れるようになった女の子は、時間があれば繰り返し練習していました。彼女たちの中で竹馬ブームがきたのでしょう。大人がさりげなく竹馬を準備して、約２週間近くと短期間で乗れるようになっています。継続する力は大人ががみがみ言って育つものではありません。子どもが自分自身で身に着けていくものだと思っています。興味を示す時期だったり、根気強さは一人ひとり違います。そこに寄り添える事が私たちの目指す「子どもが主体の保育」だと考えています。

「当たり前のありがたさ」

息子がこれ読んでと「さっちゃんのまほうのて」を持ってきました。私の好きな絵本の一つですが、途中で泣いて最後まできちんと読み終えた事がありません。世界を賑わせたパラリンピックでは、手足の不自由な選手が懸命に戦う姿に涙でした。ある車椅子のバスケット選手は「車椅子に乗る事さえ嫌な時期があったけど、今この瞬間は喜びでいっぱいです。」と語りました。過酷な練習に耐えた日々には沢山のドラマがあったと思います。息子もテレビを見ながら「なんでこの人は手がないの？」「目が見えないのに何で泳げるの？」と疑問だったようです。生命がこの世に誕生する奇跡。自分で歩ける。食事ができる。本を読める。会話ができる。この絵本を読む度に当たり前の日常に感謝です。主人公のさちこは手のない体を受け入れ、問題に立ち向かって生きようとします。日本は海外に比べて街中のバリアフリーな施設は整っていませんが、人の優しさは世界でも有名です。子ども達が社会に出てそのような方に出会った時、優しく手をかせる、声をかけられるようになってほしいです。読んだことのない方やもう一度読んでみようかなと思った方は、園にありますのでぜひ子どもさんと読んでみて下さい。

「夏と冬、子どもにどんな肌着を着せますか？」

肌着は、汗を吸収し、子ども達が快適に過ごすことができます。大人になると汗をかくことも減りますが、子どもは日中活発に動き回るのでとにかく汗をかきます。ある本にも肌着メーカー「グンゼ」が季節に関わらず大人も子どもも、肌着は着た方が快適に過ごせると研究した結果を記載していました。肌着は汗を吸収し体温調節したり、肌を清潔に保つ、服からの刺激から肌を守る役割も兼ねています。夏はもちろん、冬も子どもは汗をかきます。これから少しずつ肌寒くなってきますが、肌着は変わらず毎日持たせてください。素材は綿がおすすめです。冬も活発に動く保育園では半袖の肌着をおすすめします。外遊びが基本ですので一年中汗をかきます。子どもさんは毎日肌着をみにつける習慣をつけましょう。